

コムギ縞萎縮病に係る対応について

平成12年6月9日
北海道農政部

コムギ縞萎縮病は、北海道では平成3年に恵庭市、千歳市及び長沼町で初めて発生が確認された。平成11年には7支庁19市町村で発生が認められ、本年、新たに8市町村で発生が確認されていることから、その他の地区でも発生確認を急ぐとともに、収穫作業及び今後の作付けに注意してください。

1 病気の特徴

病徴 葉身にかすり状の退緑斑点が現れ、葉身の半分程度が黄白色となるが、6月上旬以降は不明瞭となる。草丈は低くなる。症状は起生期頃から観察される。

伝染方法 本病は土壌伝染性のウイルス病である。コムギ縞萎縮病ウイルスが土壌中に生息するポリミキサ・グラミスという土壌菌によって媒介される。発病適温は10～15℃。病土は数年以上にわたって病原性を維持する。

発生環境 早まき及び土壌水分の多いほ場で発病が多くなる傾向がある。

2 営農技術対策

(1) 発生の確認

気温が高くなると病徴が不鮮明となることから早急にほ場観察を実施し、疑わしい症状を発見した場合は、中央農試に検定を依頼する。

(2) 収穫時等の注意

病土の移動が唯一の伝染要因であることから、発生ほ場は最後に収穫し、収穫作業機等は、現地で付着した土壌を洗い流す等、病土を移動させないように注意する。

また、発生ほ場では収量及び品質の低下がみられるので、無発生ほ場と別に調整し、高品質麦の出荷に努める。

(3) 輪作体系の遵守

連作はほ場の汚染程度を高めるので、適切な輪作に努め、連作は避ける。

(4) 品種の選択

現在の基幹品種の本ウイルスに対する抵抗性には明らかな品種間差があるので、発生ほ場については作付け品種を勘案する。

表 1 縞萎縮病に対する抵抗性の品種間差(現地試験ほ場)

| 品 種 名 | 抵抗性 | 子実重(kg/a) | 千粒重(g) |
|---------|-----|-----------|--------|
| ホクシン | 弱 | 36.4 | 33.1 |
| チホクコムギ | やや弱 | 43.6 | 37.1 |
| ホロシリコムギ | 中 | 53.9 | 43.2 |
| 北見 72 号 | やや強 | 55.5 | 38.9 |

注)子実重及び千粒重は平成 7~10 年の 4ヶ年平均
平成 12 年普及奨励ならびに指導参考事項



図 1 コムギ縞萎縮ウイルスの分布 (平成 12 年まで発生市町村)

写真 1.2 発病ほ場 (中央の凹み部分 撮影 H12 年 6 月 8 日)



写真 3 発病株の症状 (上位葉にかすり状の黄化・撮影 H12 年 6 月 8 日)



写真 4 発病株の症状 (上位葉のかすり状の黄化・撮影 H12 年 6 月 8 日)

